

JA組織の次世代対策、 農業の将来への思いを込めて

JA西三河のある愛知県南西部は、年間を通して温暖な気候と矢作川のもたらす実り豊かな大地に恵まれ、「ないものはない」といわれるほど多種多様な農作物が生産される地域だ。水田ではイネと麦と大豆の2年3作の輪作体系が確立し、作業受委託などによる大規模な経営体も多い。こうした立地のもと、農業を身近に感じることのできる小学校が多く、西尾市内14校のうち11校、一色町内で1校の計12校で米づくりなどの農業体験が行なわれている。

■大規模な担い手農家が子どもたちに教える

JA組合員農家による地元小学校の米づくり体験支援を、平成20年度から教育ファームの取組みに変更し、今はJAバンク協調型事業として展開中だ。

大規模経営の農家が多いため、田植えや収穫の繁忙期とずれるよう晩生の「あいちのかおり」やモチ米などを体験に使用。これにより農家側の負担も軽減でき、米を餅などに加工して喜ばれるというメリットもある（卒業式の紅白餅に使う小学校も）。

また、子どもたちは手によるイネ刈り体験のほか、機械収穫も見学。自分たちが時間をかけて刈り取っていた田んぼが、機械であつという間に脱穀まで済んでしまうのを見て、機械化のメリットを肌で感じるができる。

いっぽう、騒音の出る大型機械での作業や資材散布などは宅地化が進む地域では近隣の理解が不可欠だが、教育ファームの取組みがその大切な理解促進にもつながっていくようだ。また、給食に指導農家の米や大豆を使用している小学校では、残食率が月平均1%弱にまで減少したという、うれしい成果も生まれている。

■生産者も変わる……食べる人考えた米づくりへ

「教育ファームに携わると、自分がつくったお米を誰が食べるのか知らなくていいという気にはならなくなります。食べる人のことを考えて減農薬などにも取り組まないといけない気持ちになってきます。学校に出入りするなかで、栄養士の先生が子どもたちのためにがんばってくれているのを見て、子どもにとって栄養バランスは重要で、給食の充実は大切なことだと感じています。農家としては体験後の子どもの作文を読ませてもらうことが何よりの喜びです」（指導農家）

今、水田輪作による地場産小麦パンや、米粉料理を給食へという取組みが一部小学校で始まった。ここから、地域の加工業者や調理のプロなどとの新しい連携が生まれつつある。

子どもたちに食と農の大切さを伝えていくことは、JA組織の次世代対策としても、農業の将来にとっても重要!との思いが、JA西三河の活動には込められている。